

■肢体不自由のある子どもたち・知的障害のある子どもたちへの実践事例

豊かな読書活動を目指した学校図書館の整備と マルチメディアDAISY図書役割

東京都立鹿本学園
教諭 志水 崇人

はじめに

東京都立鹿本学園は、肢体不自由教育部門（小・中・高）と知的障害教育部門（小・中）、2部門5学部で構成される特別支援学校です。肢体不自由教育部門159名、知的障害教育部門291名、合計450名（2022年5月1日現在）の児童・生徒が在籍している大規模校です。2023年度に本校は創立10周年を迎えます。「読書の楽しみを！」と考え、開校当初から、「読書活動の推進」を学校経営計画で示しており、読書環境の整備や読書推進月間など児童・生徒の意欲を高める取り組みを、全校一丸となって実践しています。今回は10周年を迎えるにあたり、見えてきた学校図書館としての課題とその中におけるマルチメディアDAISY図書の役割や活用についてまとめます。

本校の特色

前述のとおり、本校では創立時より「読書活動の推進」を学校経営計画で示しており、読書環境の整備や読書行事など、子どもたちの読書に対する意

欲を高める取り組みを、全校一丸となって実践してきました。子どもたちは読書推進月間をはじめ、読書マラソンやPOPコンテストなど、読書行事への積極的な参加もあり、年間の貸出数は新型コロナウイルス感染症流行前では11,000冊を超える年もありました。この10年の間にさまざまな読書活動を行ってきたことで、学校図書館が「子どもたちにとって身近な場所」になっています。また、肢体不自由教育部門の校舎にある学校図書館の他に、オープンライブラリー、紙芝居スペース、江戸川区立中央図書館との連携スペースなど、いつでも子どもたちが図書を手に取りやすい環境を目指して環境の整備を行っています。

新型コロナウイルス感染症予防

2020年からのこの3年は、学校図書館運営と新型コロナウイルス感染症予防の両立が大きな課題でした。新型コロナウイルス感染症の予防のため、学校図書館の利用に関して、時間や人数制限などのルールを設け、児童・生徒、

教職員の協力のもと、密を避けた学校図書館の運営に尽力しています。

また、昨年度は、校内貸出パックと称し、2週間20冊をまとめて学級・学習グループへ貸し出す取り組みを行っていました。感染防止のためとはいえ、「身近な場所」である学校図書館で、子どもたちが図書に触れる機会が減ってしまわないように、いま現在も試行錯誤を重ねて運営を続けています。

環境整備の取り組み

開校以来、さまざまな取り組みをしながら、学校図書館の環境の整備を進めてきましたが、傷みが激しい本や資料としては、古い本も見受けられるようになってきました。そこで2022年度は、夏季休業中に学校図書館の大整理を行いました。傷んだ図書の廃棄、修復を行いながら、日本十進分類法で書架を整備しました。蔵書リストで文字として見る図書とは異なり、視覚的に本校の現状を実感することにつながりました。今後揃えていくべき図書を確認することもできました。

あわせて、図書の購入の際に、実際に教職員から購入したい本について希望や意見を募りました。授業で使いたい本や子どもたちが興味・関心のある本を、子どもたちの指導にあたる教職員の生の声として購入に反映することで、学校図書館としての大きな役割を

果たすことができると考えています。

また、新型コロナウイルス感染症予防に関する取り組みの中で、限られたスペースを限られた時間、人数で使用する知的障害教育部門の校舎にも充実した学校図書館が必要であるという意見がありました。もともとあったスペースを有効活用し、図書スペースを作りました。まだまだ充実した学校図書館とは言えるものではありませんが、少しずつ状況は改善してきています。

これからの鹿本学園の学校図書館

これまで積み上げてきた経験や今年度取り組んでいることから、これからの鹿本学園の学校図書館について、つぎのようなビジョンをもって、われわれ担当は業務にあたっています。

(1) 子どもたちが図書に触れる機会をより多く確保できる学校図書館

本校は大規模校である利点から、多くの子どもたちが読書を通じて交流が図れるようさまざまな試みに取り組んできました。これまでの試みを活かしながら、新型コロナウイルス感染症の災禍にも負けず、豊かな読書活動を継続していける環境が求められています。

(2) 授業のヒントがたくさん詰まった環境

学校図書館である以上、教職員にとっても授業作りや教材作りのヒントが得られる場所である必要があります。「ただ本を借りる場所」になってしまわないように教職員から購入図書のリクエストを募ることなどを通して、その点を意識してもらうような運営の仕方が求められています。

また、授業作りのヒントの一つとしてマルチメディアDAISY図書の役割も関わってくると考えています。こんな場面で使うことができる、このような実態の子どもたちには効果的であるなど、いままでの研究報告にはたくさんの実践が詰まっています。これらの発信も学校図書館の役割の一つになります。

(3) 外部との連携を活用し、より豊かな読書活動を行う

公立図書館やお話会グループの方々の力を大いに活用していきます。お話会は子どもたちの「聞く耳・見る目」を育み、より豊かな読書活動につながります。教職員にとっては、お話会を楽しむ子どもたちを客観的に見ることができ、指導に反映していく機会にもなります。また、学校図書館の運営についても、専門家の協力をいただきながら、いままで行き届いていなかった部分まで整備を進めていきます。ティーンズ向けの掲示物を作成してい

ただくなど、幅広い実態に適応できるようにいろいろな試みを模索しています。

マルチメディアDAISY図書の活用

今年度、実際にマルチメディアDAISY図書を活用した例を紹介します。知的障害教育部門小学部、肢体不自由教育部門高等部から、それぞれ1例ずつ報告します。実際に使用して、生徒たちの様子や教員が感じたこともあわせて紹介させていただきます。

(1) 知的障害教育部門・小学部5年の活用例

<作品名>

『やさいだいすき』『もけら もけら』
『さよなら さんかく』『くださいな』
『がたん ごとん がたん ごとん』
『おにぎりくん』など

<授業のねらい>

- ・絵本に親しむ
- ・短い文を声に出して読む

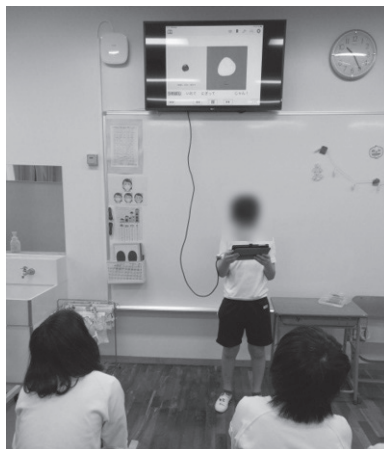
<子どもたちの実態>

太田ステージⅢー1～2の子ども

どの子どももひらがなの清音と濁音を読むことができるが、一文字ずつ指で追って読む段階である。簡単な言葉でのやり取りができるが、発音が不明瞭な子どもが多い。

<活用方法>

- ・国語・算数の音読教材、読み聞かせ教材として（お話を見聞きした後に、いくつか質問を行った）
- ・昼休みの余暇活動として（子どもが好きなものを選んで見る）
- ・タブレット版のマルチメディアDAISY図書をそのまま用いたり、モニターに映したりしながら活用した。



<子どもたちの様子>

- ・発音が不明瞭な子どもが多いクラスのため、音声 flowed 後に子どもが読むことができるマルチメディアDAISY図書は、聞いている子どももあきずに発表している子どもに注目しやすかった。
- ・音声を聞いて読むことで、抑揚を意識して読むことができるようになってきた。



<教職員からの感想>

- ・本の種類が多く、子どもたちがあきることなく見聞きすることができた。
- ・テレビの画面は注目することがむずかしかったが、タブレットだと集中してよく見ることができていた。
- ・スピードの調節や、文字の大きさが変えられる機能があり良かった。



(2) 肢体不自由教育部門・高等部1年の活用例

<作品名>

『しょうぼうじどうしゃ じぶた』

<授業のねらい>

- ・集中して見たり聞いたりする

<子どもたちの実態>

- ・自立活動を主とする教育課程7名。
- ・簡単な問いかけにサインやうなずきで応じることができる生徒が2名。
- ・視線や表情で思いを伝える生徒が大多数。
- ・読み書きはむずかしい。

<活用方法>

- ・生活単元学習の時間に、読み聞かせとして活用した。
- ・パソコン版のマルチメディアDAISY図書をモニターに映して使用。

<子どもたちの様子>

- ・初めの3～5分は見続ける。
- ・だんだん視線・集中がそれてくる。
- ・音やかけ声を近くの教員が発するようになると、再び注目できることもある。

<教職員からの感想>

- ・教員が聞き手の生徒たちの表情を見ながら進める「生」の読み聞かせの

ほうが良いと感じた。



「テレビに映した場合は集中しにくいですが、タブレット端末を用いると集中が持続する」「実態や場面によっては、教員による生の読み聞かせのほうが効果的に思える」などマルチメディアDAISY図書の使い方に関して、参考になる意見をもらうことができました。教職員による読み聞かせ以外にもさまざまなICT機器やアプリ、オーディオブックなどが日に日に増加しています。「あるものをただ使う」のではなく、その中の一つの選択肢として、マルチメディアDAISY図書を位置づけ、子どもたちにとって効果的なもの、適切なものを選んでいく力が、今後の教職員にはより一層求められていくことになります。

おわりに

本校は10周年に向け、前述の3つのビジョンをもとに、より豊かな読書活動を行うことができる学校図書館を目

指して整備、運営を進めています。まだまだ試行錯誤を重ねている途中ですが、幅広い実態の子どもたち一人ひとりに合った読書活動を示すことができるよう、広い視野をもって、紙媒体である本、そしてマルチメディアDAISY図書をはじめとする、デジタル媒体にも触れていきたいと考えています。

GIGAスクール構想、DX (Digital Transformation デジタルトランスフォーメーション) 社会、Society5.0などデジタル化に関する用語がたくさん飛び交う社会になりました。本や漫画もスマートフォンのアプリで読むことが主流になりつつあります。その流れの中でも、読書活動が子どもたちにもたらす役割は変わらないものだと考えています。

しかしながら、子どもたちの実態によって受け取り方や感じ方が、媒体によって大きく変化することもまた事実です。いろいろな手段が増えたからこそ、それぞれの特徴が注目され、われわれ教職員もその特徴の差から子どもたちに適切なものを選ばなければなりません。「マルチメディアDAISY図書だからこそできること」というものがより明確に示されていくことが、今後のマルチメディアDAISY図書に求められていくのではないのでしょうか。「他のツールと比べてこのような利点がある」ということを考える視点をもって、われわれも活用を続けていきたいと思っています。

